



2016年6月28日国際交流サービス協会主催の会で講演（於：国際文化会館）
（武田アンド・アソシエイツ代表 武田修三郎）

通訳協会関係者 80 名程の会で『平成の訳語(おさ)Age of Digital Disruption』と題し、デジタル時代の創造的破壊による大変革期が導く新たな時代について、その本質と求められる通訳のプロとしてのマインドについて講演した。

講演参加者の多くが通訳あるいはガイドを職業とする方々で、日本の外交の裏にはいつも「訳語」（おさ＝通訳）の存在があったと遣隋使で小野妹子に随行した鞍作福利（くらつくりのふくり）から明治維新のジョン万次郎や福沢諭吉を例に出し、日本の革新期に「訳語（通訳）」が果たした役割について言及。

また、現代の日本固有の問題として、世界の高等教育における学生数の大幅な伸びに対して日本の学生数は増えていないこと。また大学進学率では米国に追いつけないだけでなく、韓国にも追い抜かれてしまったこと。若者はリスクを避けて定年まで安定した仕事を目指し、研究者は学术论文を書かなくなっているなど、日本の国際競争力が劇的に低下していることを指摘。人口増加による「人口ボーナス」（経済等の成長）が既に終わりを告げ、2050年には平均年齢 52.3 歳となり、GDP は世界の 1.9%（1990年には 15%）という予測を例に挙げ、このままでは「日いずる国」ではなく「日しずむ国」になると警鐘を鳴らした。

その一方、世界ではデジタルなデータが指数関数的に増大しており、過去 3 年のデータ量はその前の 4 万年分よりも多いことを指摘。ひとつのテクノロジー

が様々なものに発展するテクノロジーの「幹」として、21世紀はデジタルテクノロジーが「幹テクノロジー」となると解説。現代の科学では人間を含む自然の大本は、アナログ的連続性の世界ではなく、デジタル的離散値（とびとび）の世界であり、デジタル的思考の重要性を強調した。

またその様な世界での教育は「厳しいが失敗を恐れず、創造力が習得できて才能よりも気概（ガッツ）を大切にする」ものであるべき、より高い目的と、より深い思考へ導くものでなければならない、とした。

参加者に対しては「(通訳など) 多文化を経験することは、その人の創造性を増加させる」と励まし、「自己評価ができる(自分に厳しく)」、「飛躍ができる(本物を知る)」、「世界主義的見解が持てる(より深い思考)」、「デジタル思考ができる」ことを目指して欲しいと話を結んだ。

(以下、講演写真添付)